

罪と罰

スカネボーから北東へ 15km、オーフス自治体の西の農村地帯にある「Snaastrup Vestergaard (スナスタープ・ベスタボー)」を再訪した。

前回訪ねたのは 2012 年冬。自治体が運営する知的障害、ADHD の人たちの「グループホームと農場 (ケア・ファーム)」とのことだった。

が、最後の最後に施設長が会議から帰ってくると「4名は刑事犯です。知的障害の人たちは普通の刑務所にはあわないので、それをケアすることのできるこの施設にいます」「いま、新しい住宅を建築してますが、判決の下った人が6名まで暮らすことのできる住宅です」と聞いて、つぎはぜひ、そこをじっくり見せて欲しいと願った。



現在、16名が居住し、4名が通ってくる。

職員は 34 名で、ペタゴ（生活支援者）+ 2 名がリーダー+事務職 1 名（2012 年のときは職員 25 名+ 10 名の臨時スタッフだったから体制はだいぶ強化された）

○ 1991 年に、4 人の住居と日中活動の場としてスタート。

○ 2009 年に、平屋を建て、8 人が入居。

○ 2011 年、古い建物を改築してさらに 2 名が入居。

○そして、2014 年、6 か月前に 6 名の新しい住居ができる。

仕事は牛、羊、ニワトリの世話、野菜作り、薪割、工事現場などの跡片づけ、出張造園など。

「ここはアパートです。彼らの住居です。"入ってくるな!"と言われれば、職員でも入ってはいけない。私たちはいつでも彼らの興味・関心を導き、新しい刑法にひっかからないようにしています」と 20 代の若いスタッフが言う。

「5 年間服役の判決で、ここで暮らしている放火



犯もいます。放火魔の場合は火を持たせないようにしますが、ここでは普通の人と同じように接しています。ですが、建物と農地のところまでは自由に行動できるがそれ以外は許可が必要ですし、外泊は禁止です。それ以上のときはさらに弁護士の許可が必要です」

「高い塀とか壁はないですが・・・？」と質問すると、「脱出することを止めはしませんが警察には通報します。そして捕まれば、ここにはいられなくなります。デンマークで唯一、ローランド島にある囲われた閉鎖施設 (刑務所) に入ることになります。それはみんなイヤなようで、ここでルールを守っています」

「スタッフ自身の身を守ることも研修しています。緊急用のアラームをスタッフは持っていて 8 人はすぐにやってくる体制です。観察表は毎日つけている。でも、仕事はみんなと一緒にしています。少ないけれど 10 ~ 15 クローネのお金ももらえる」

「成功した満足感を与えられるように。人間関係をつくり、プラスの喜びを感じられるようにしている」

最後に、いろいろわたしたちを案内してくれていた好青年が、「いま 5 年目の青年なんですよ」と聞かされて、とても驚いた。





デンマークの場合、刑法第 16 条により精神障害者であれば、その触法行為に対して刑罰を科さない。「治療判決」を言い渡されると、政府犯罪局が付した条件のもとで生活し、特定の治療を受けることが義務づけられる。

知的障害者は、全国に 1 カ所あるという触法知的障害者専門の入所施設に収監されるか、スナスタープのような「24 時間監視」の条件での住居で暮らす。一人年間 4000 万円の予算。

(坂本俊彦「触法精神科医療と司法福祉処遇」より)



夏の終わりに「JD サマースクール」を受講する。テーマは「罪を犯した障害のある人の実情とその背景を知る！学ぶ！」

刑務所の中には障害者が多いといわれ、4 人に 1 人は IQ で 70 以下とも。なぜ刑務所に入らねばな



らないのか・・・

厚労省の役人は、「地域生活定着支援センター（職員 6 名、予算 2500 万円）」が 3 年かかってすべての県に広がった。NPO や社会福祉法人委託がほとんどとのこと。あまりにもお粗末な予算(^^)

発達障害の子どもの医療少年院では、13 万人の触法の子らには入所は、東大入試より狭き門だが、基本的生活の仕方、排泄に関する指導、被服、ベルトしめ、靴左右などを必死で指導している。

「過去は変えられない。でも、子どもの成長に応じ、過去を再評価して意義づけすることはできる」「未来は変えられる」「自分自身の尊厳の実感を」「居場所と出番つくって誉めてあげてます」

という現場からの報告にはとても励まされた。

でも、この分野でも、日本のとりくみは、「竹槍」で巨象に向かっているようだ。

(菌部英夫)

